

長岡京左京三条四坊十・十一町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇八―一六

長岡京左京三条四坊十・十一町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京左京三条四坊十・十一町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、工場新築工事にともなう長岡京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

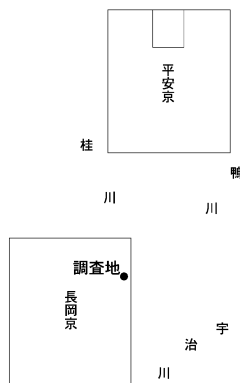
平成 21 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京左京三条四坊十・十一町跡
長岡京左京第 529 次調査 (7AN-WGD-001)
- 2 調査所在地 京都市伏見区久我西出町 8- 8 ・ 8- 9
- 3 委 託 者 協和精工株式会社 代表取締役 山下徹也
- 4 調査期間 2008 年 11 月 26 日～ 2008 年 12 月 26 日
- 5 調査面積 約 288 m²
- 6 調査担当者 布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺 1 : 2,500) 「久我」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI (ただし、単位 (m) を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 布川豊治
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の既調査	2
3. 遺 構	4
(1) 基本土層	4
(2) 遺構	4
4. 遺 物	9
(1) 土器類	9
(2) その他の遺物	10
5. ま と め	11

図 版 目 次

図版1	遺構	1	全景（北から）
		2	建物1（西から）

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（北から）	3
図4	調査風景（南から）	3
図5	遺構平面図（1：100）	5
図6	調査区断面図（1：100）	6
図7	建物1実測図（1：50）	7
図8	溝20断面図（1：20）	8
図9	溝30断面図（1：20）	8

図 10 土器実測図（1：4）	9
図 11 出土土器	9
図 12 石鏃実測図（1：2）	10
図 13 石鏃	10

表 目 次

表 1 遺構概要表	4
表 2 遺物概要表	8

長岡京左京三条四坊十・十一町跡

1. 調査経過

調査地は京都市伏見区久我西出町 8 - 8・8 - 9 に所在し、長岡京の条坊で長岡京左京三条四坊十・十一町および三条条間小路の推定地にあたる。当地において工場の新築工事が計画されたため、京都市文化市民局芸術都市推進室文化財保護課（以下「保護課」と略する）が試掘調査を実施したところ、東西溝や南北溝などが検出され、遺構の遺存状態が良好であることから、(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。長岡京における調査では左京第 529 次調査となる。調査区は東西溝が検出された部分を中心に、南北約 22 m、東西約 12 m の方形に設定した。

調査は、11 月 26 日から付帯工事、物品搬入を行い、実施した。盛土、旧耕作土を機械掘削で除去し、遺構面を検出した。鎌倉時代から室町時代と考えられる耕作溝、長岡京期と考えられる東西溝や柱穴などを同一面で検出した。まず鎌倉時代から室町時代の遺構の調査・記録を行い、

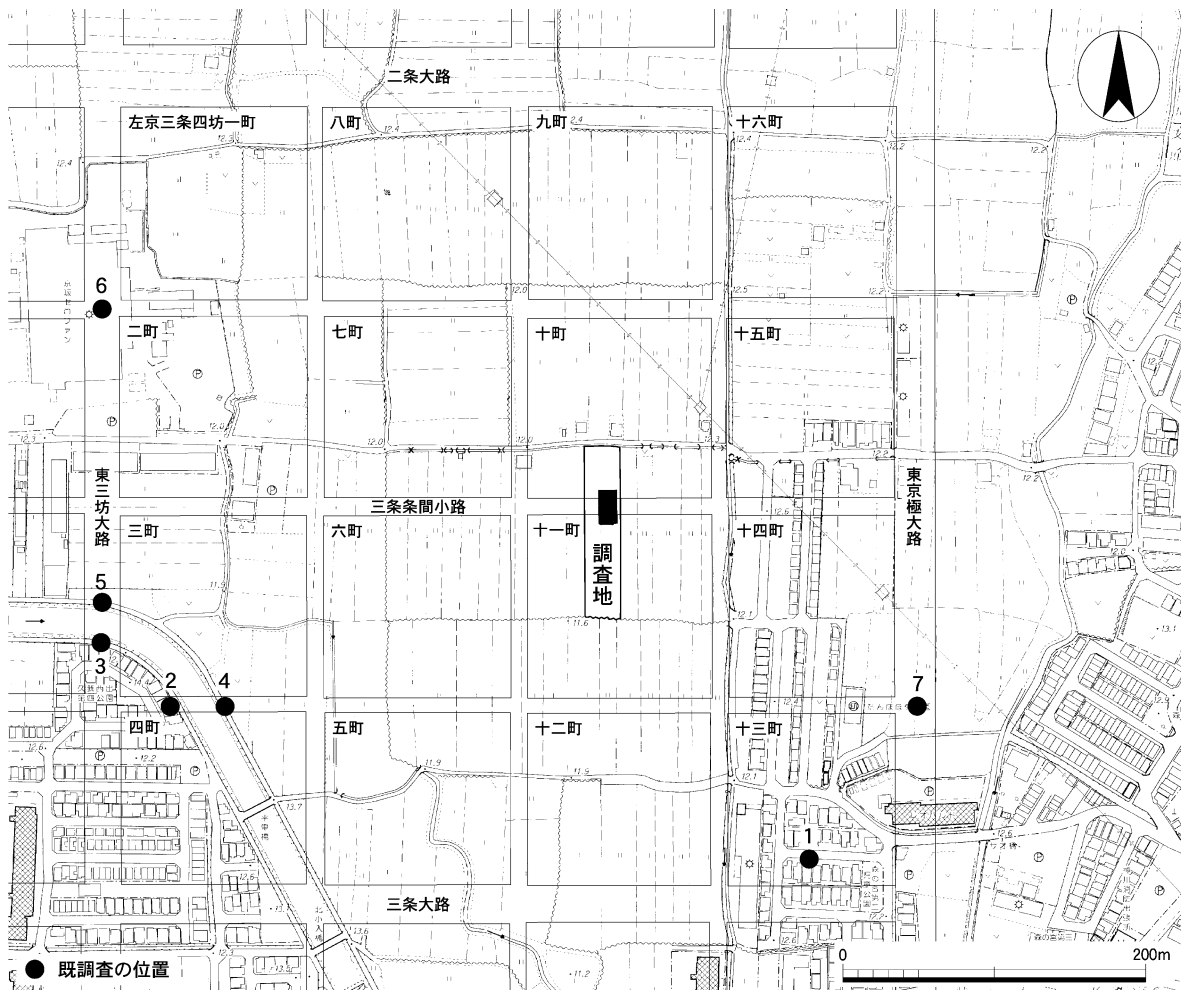


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

ついで長岡京期の遺構の調査・記録を行った。その後、調査区南側で検出した東西柱穴列に対応する柱穴の有無を確認するため、幅約1m、東西約9mの規模で調査区南側を拡張した。その結果、新たに柱穴を検出し、建物跡であることを確認した。これらの図面作成、断割りなどの補足調査を進め、最後に埋め戻し、物品搬出などを行い、12月26日に全ての現場作業を終了した。

なお調査中は、適時、保護課の検査・指導を受けた。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、西方の向日丘陵と東方の桂川間の低地にあり、桂川右岸から約1.1km西に位置する。近辺の標高は北西から南東へ緩やかに低くなっている。調査地の西方を走る名神高速道路沿いには、

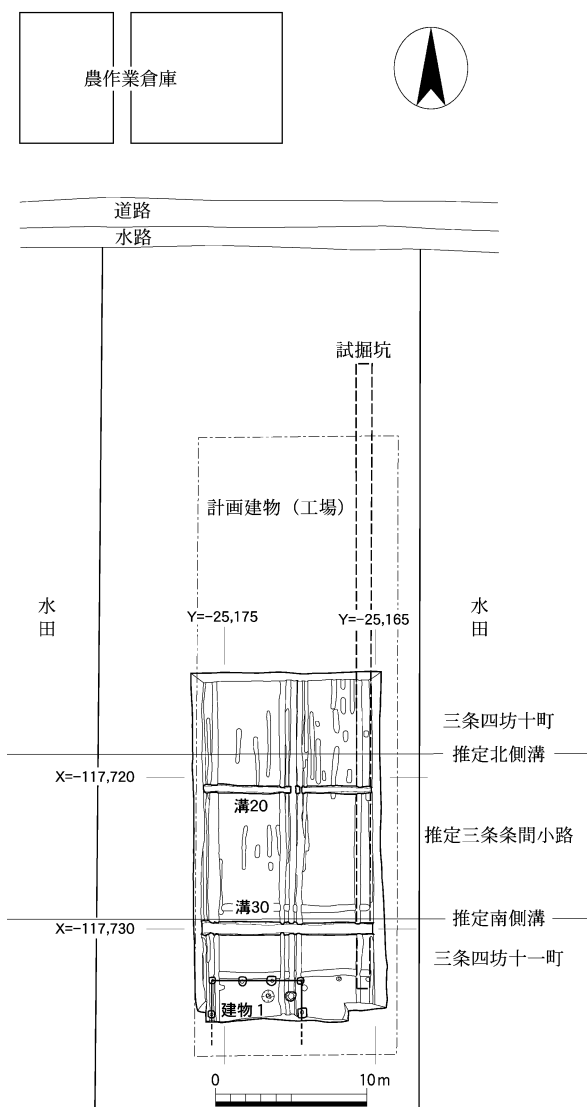


図2 調査区配置図 (1 : 500)

北から順に、弥生時代から古墳時代の集落跡である東土川遺跡、弥生時代を中心とする縄文時代から古墳時代の集落跡である鶏冠井遺跡、弥生時代中期を中心とする集落跡である縄文時代から古墳時代の鶏冠井清水遺跡などがある。

延暦3年(784)、桓武天皇によって平城京から乙訓の地に長岡京が遷都がされた。調査地は、長岡京の左京三条四坊十町南側と十一町北側および三条条間小路に推定され、町の中央よりやや西側に位置する。

長岡京は、延暦13年(794)、廃都され、平安京に遷都される。廃都後の乙訓の地は、平安京と西国を結ぶ交通の要衝として発達し、集落が形成されていく。調査地近隣では、約1km北西に平安時代後期の離宮跡である久我殿遺跡、約0.9km南東には室町時代初頭の環濠集落跡である久我東町遺跡がある。

(2) 周辺の既調査(図1)

調査1(1980年)では、古墳時代の溝、長岡京期の東西溝(道路側溝)、井戸などが検出されている。



図3 調査前全景（北から）



図4 調査風景（南から）

調査2（1983年）では、長岡京の三条条間南小路の¹⁾両側溝、建物跡など、調査3（1983年）では、長岡京の東三坊大路の両側溝などが検出されている。²⁾

調査4（1985年）では、長岡京の三条条間南小路の南側溝、建物跡など、調査5（1985年）では、弥生時代の溝、長岡京の東三坊大路の西側溝などが検出されている。³⁾

調査6（1985年）では、縄文時代晩期から弥生時代の土器を多量に含む溝、長岡京の東三坊大路の両側溝、建物跡、井戸などが検出されている。⁴⁾

調査7（2006年）では、鎌倉時代の溝などが検出されている。⁵⁾

註

- 1) 本書では、(財)向日市埋蔵文化財センター年報『都城10』1999年 条坊復原図の条坊名を使用した。
- 2) 鈴木廣司・長宗繁一「左京三条三・四坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 3) 鈴木廣司・長宗繁一「長岡京左京二・三条三・四坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 4) 鈴木廣司・長宗繁一「長岡京左京二条三・四坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 5) 吉村正親『長岡京左京三条四坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘報告2006-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年

参考文献

- 向日市文化財調査事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター『再現・長岡京』京都府向日市 2006年版
 野島 永、岩松 保ほか「長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡」『京都府遺跡調査報告書 第28冊』
 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
 『京都市遺跡地図台帳』「第8版」京都市文化市民局 2007年

3. 遺 構

(1) 基本土層

当地は水田地帯にあり、現地表面の標高は 11.9 ～ 12.0 m である。表土下 0.55 ～ 0.6 m が水田を造成した現代の盛土であり、周囲より高くなっている。この盛土を除いた面が、本来の水田面の高さであり、11.4 m 前後の標高である。以下順に、近代から現代の耕作土が厚さ 0.15 ～ 0.2 m、江戸時代の耕作土が厚さ約 0.2 m、鎌倉時代から室町時代の耕作土が厚さ 0.3 ～ 0.45 m である。その直下が遺構を検出した面で、標高は 10.7 m 前後、ほぼ水平面であり、鎌倉時代末期から室町時代の耕作溝、長岡京期の建物や溝などを同一面で検出している。遺構面を形成している基盤層は、断割り調査の結果、灰色粘土質土などの自然堆積土層であり、地山であることを確認した。

(2) 遺構

検出した主な遺構は、長岡京期の東西溝と調査区南側の建物跡、および鎌倉時代以降の耕作溝と推定される多数の南北溝と 2 条の東西溝である。

また調査では、遺構として検出していないが、縄文時代の石器（石鏃）や平安時代中期の遺物が出土していることから、近隣にこれらの時期の遺構が存在する可能性が高い。

長岡京期

検出したこの時期の主な遺構は、建物 1、東西溝の溝 20・30 などである。溝は、条坊遺構の南北側溝で、溝 20 は北側溝、溝 30 は南側溝と考えられるが、路面および築地などは確認できなかった。

建物 1（図 7） 調査区南西部で検出した掘立柱建物である。建物の北側柱穴列は、溝 30 の中心から 3.4 ～ 3.5 m 南に位置する。東西 3 間、南北 1 間分を検出した。検出した範囲では、身舎が東西 3 間、南北 2 間の東西棟と考えられる。柱間は、南北 2.1 ～ 2.25 m（7.5 尺）、東西約 1.95 m（6.5 尺）である。柱穴掘形は、隅丸方形であり、一辺が 0.4 ～ 0.6 m、深さは 0.4 ～ 0.6 m、柱痕跡の径は 0.2 ～ 0.3 m である。柱穴からは長岡京期の遺物が出土した。

溝 20（図 8） 調査区北側で検出した東西溝である。検出した規模は、東西約 11 m、幅は 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m であり、東西は調査区外に延びる。底面は、ほぼ水平で高低差がほとんどみられない。埋土は 2 層に分かれ、上層が黄灰色粘土、下層がにぶい黄色粘土である。また、溝底面の東西方向中央部が峰状に少し盛り上がり、埋土が二分されるが、埋土は類似し、出土遺物

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
長岡京期	掘立柱建物 1、溝 20・30、土坑	溝は三条条間小路南北側溝
鎌倉時代末期 ～室町時代	耕作溝、柱穴など	耕作溝は、南北溝が多い

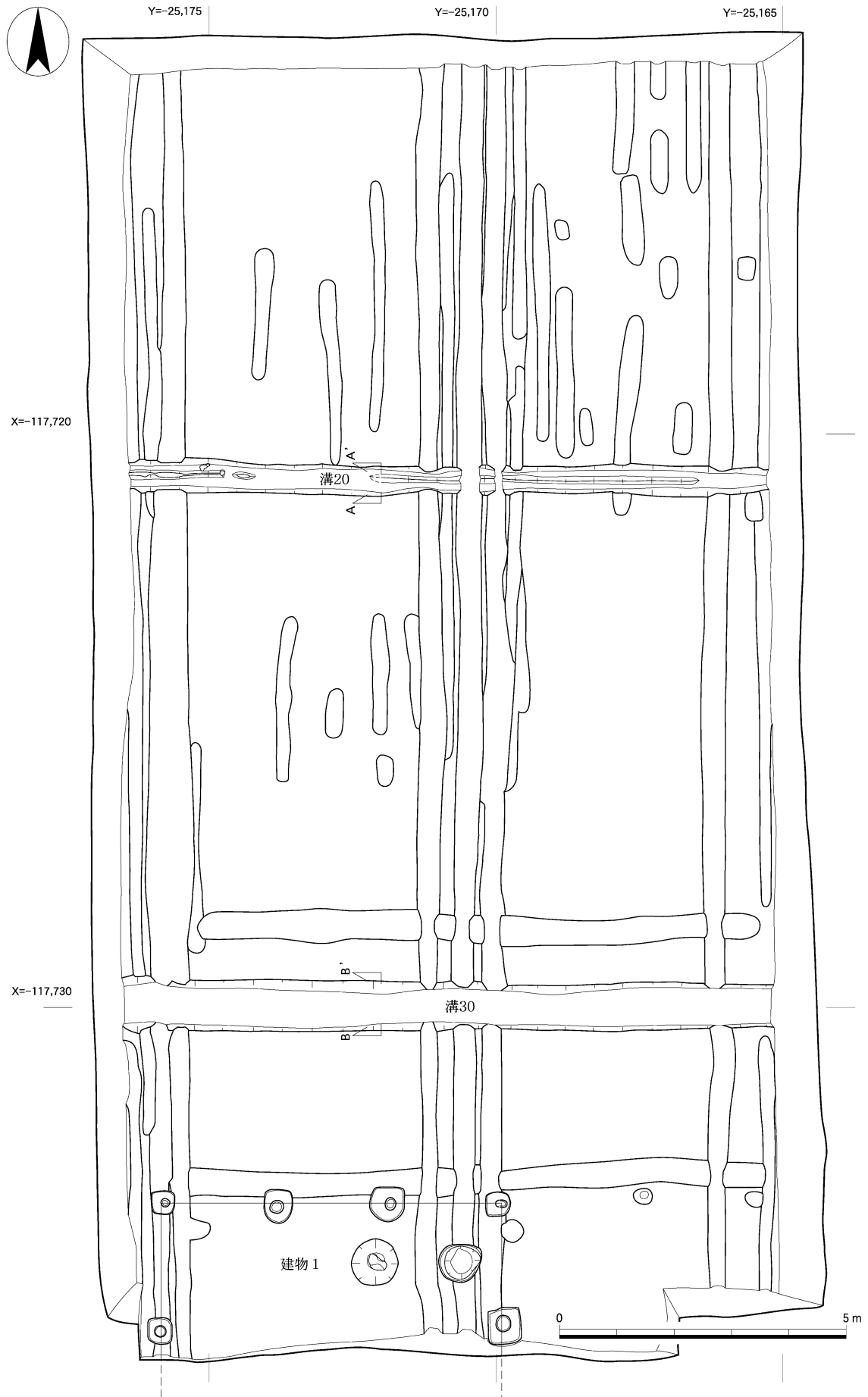


图5 遺構平面図 (1 : 100)

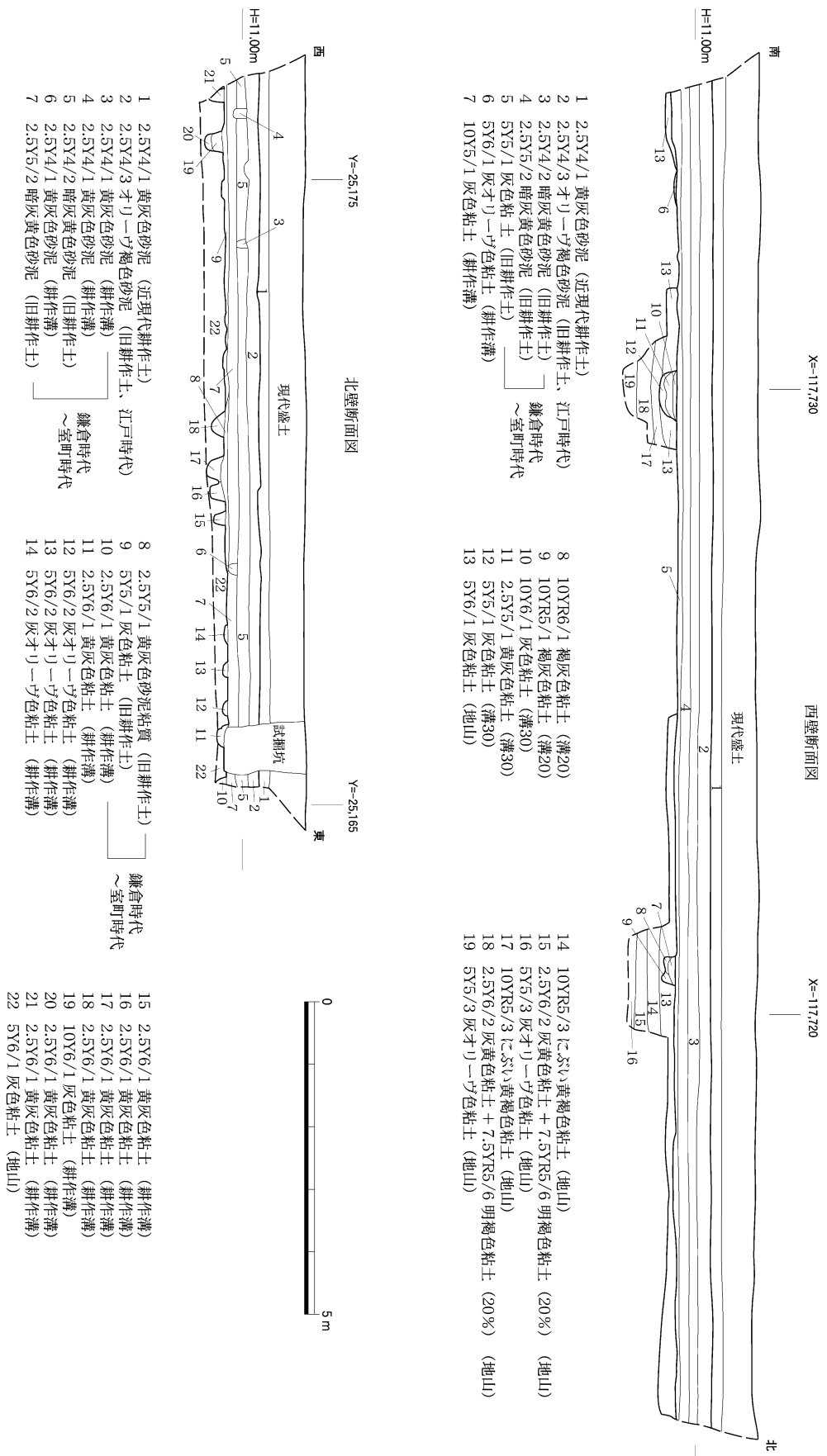


図6 調査区断面図 (1:100)

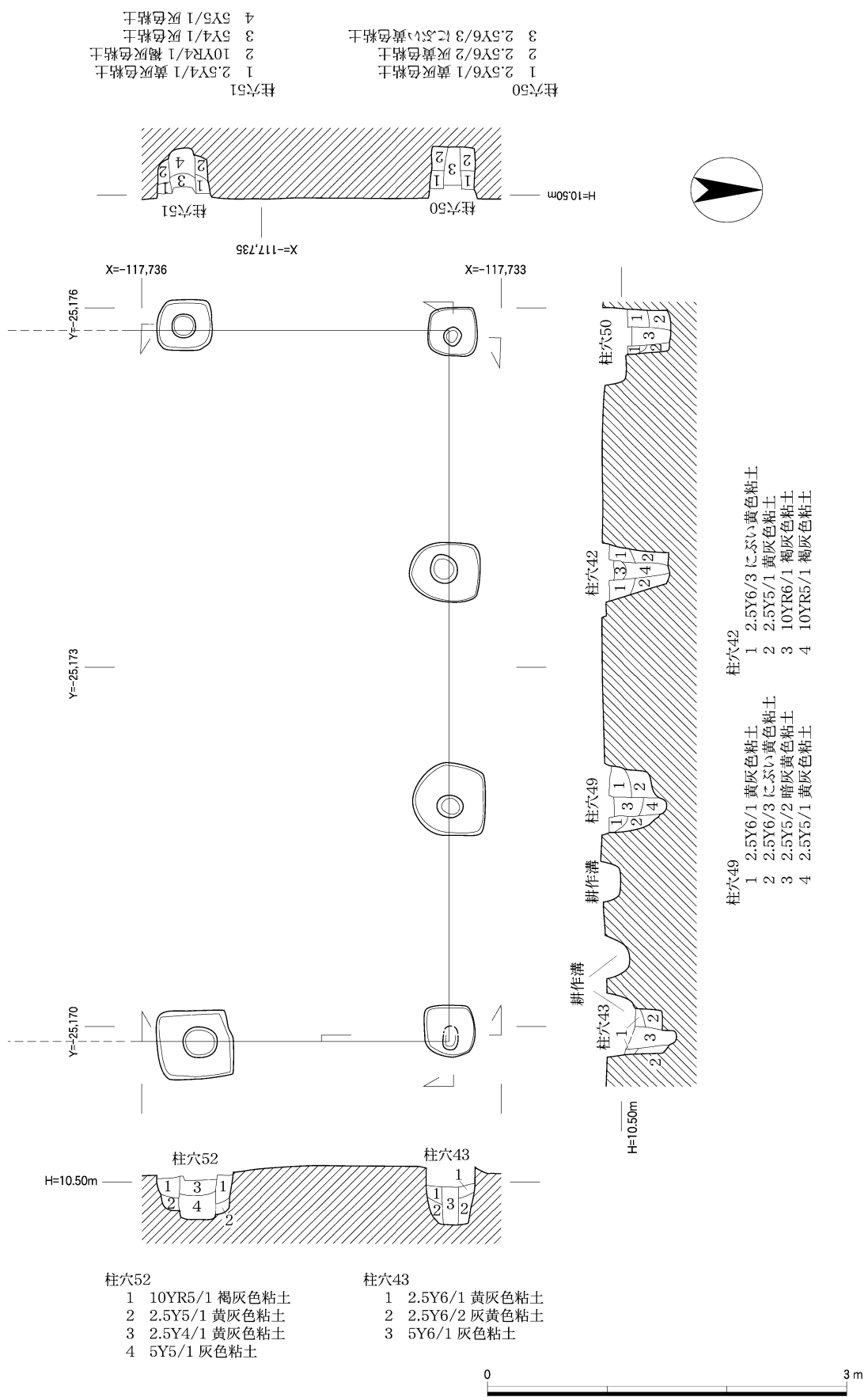


図7 建物1実測図 (1:50)

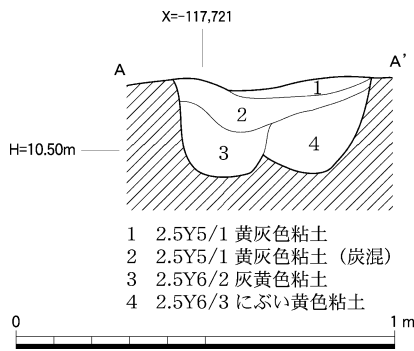


図8 溝20断面図(1:20)

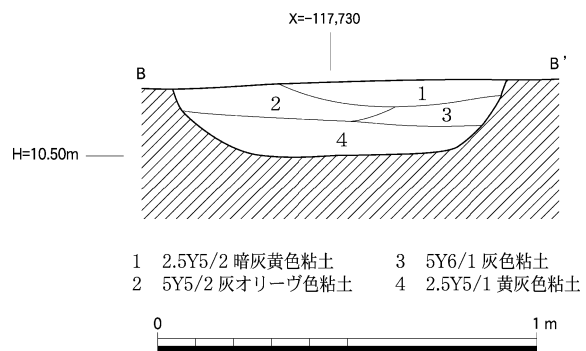


図9 溝30断面図(1:20)

は同時期であることから、溝には時期差がないと考えている。長岡京期の遺物が出土した。

溝30(図9) 調査区南側で検出した東西溝である。検出した規模は、東西約11m、幅は0.8～0.9m、深さ0.25m前後であり、東西は調査区外に延びる。底面は、ほぼ水平で高低差がほとんどみられず、溝20より約5cm低い。埋土は2層に分かれ、上層が暗灰黄色～灰色粘土、下層が黄灰色粘土である。長岡京期の遺物が出土した。

鎌倉時代末期から室町時代

長岡京期の遺構と同一遺構面で耕作溝を多く検出した。

耕作溝 調査区全体にわたり検出した。ほとんどが南北溝で、幅0.2～0.8m、深さ0.1～0.3mある。これらの溝は、重複関係から溝20・30より新しいものであり、耕作関連の溝と考えられる。また、これらより少し古いと考えられる東西耕作溝2条も検出した。埋土は、主に黄灰色粘土である。鎌倉時代末期から室町時代初期の遺物が出土した。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石器		石鏃2点		
弥生時代	土器				
長岡京期	土師器、須恵器、黒色土器、瓦、木片、骨、種子		須恵器3点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器				
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦器、輸入磁器		輸入白磁1点		
江戸時代	染付磁器、施釉陶器、瓦				
合計		7箱	6点(1箱)	1箱	5箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

4. 遺物

遺物の多くは、耕作溝から出土しており、ほとんどが細片である。古墳時代のものはみられなかったが、縄文時代から江戸時代までの各時代のものが出土している。そのなかでは長岡京期と鎌倉時代後半期から室町時代のものが比較的多く、他は少数である。

縄文時代の遺物は石器、弥生時代では土器類、長岡京期では土器類、瓦類など、平安時代では土器・陶器類、鎌倉時代から室町時代では土器・輸入陶磁類、江戸時代では土器・国産施釉陶磁器類、瓦類が出土した。それらの中から比較的残存状態のよいものを図示した。

(1) 土器類 (図 10・11)

弥生土器には甕がある。土師器には椀・皿杯類・高杯・甕・焙烙がある。須恵器には杯・皿・椀・蓋・壺・鉢・甕・釜、黒色土器にはA類の杯、B類の杯皿類・甕がある。緑釉陶器・灰釉陶器は各々小片1点ずつである。瓦器には椀・釜・鍋がある。染付磁器と施釉陶器は各々小片1点ずつである。

(1) は須恵器杯Bの底部で、高台径は 11.6 cm、残存高は 2.75 cmを測る。高台は貼付けであり、体部は平底の底部から緩やかに外傾して立ち上がる。焼成は良好で、胎土は灰白～明緑灰色である。底部内面は平滑化した使用痕が認められ、硯に転用した可能性が高い。長岡京期¹⁾に比定できる。耕作溝から出土した。

(2) は須恵器壺の底部で、高台径は 12 cm、残存高は 4.1 cmを測る。やや高い貼付け高台が付き、体部はやや内湾しつつ立ち上がる。焼成は良好で、胎土は明緑灰色である。長岡京期に比定できる。耕作溝から出土した。

(3) はいわゆる鉄鉢形の須恵器鉢であり、口径は 20.6 cm、残存高は 9 cmを測る。体部が大きく開き、上端から口縁部にかけて内湾する。口縁端部は内傾する端面を呈する。残存する体部の外面下半は丁寧なケズリ痕を残すが、上半から口縁部外面および内面はヨコナデ調整によって仕上げられている。焼成は良好で、胎土は明緑灰～明青灰色である。長岡京期に比定できる。溝 30 から出土した。

(4) は輸入白磁皿である。口径は 11.4 cm、器高は 3.3 cmを測る。体部は

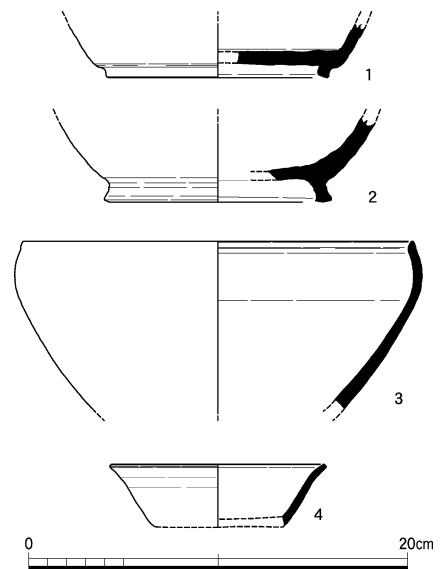


図 10 土器実測図 (1 : 4)

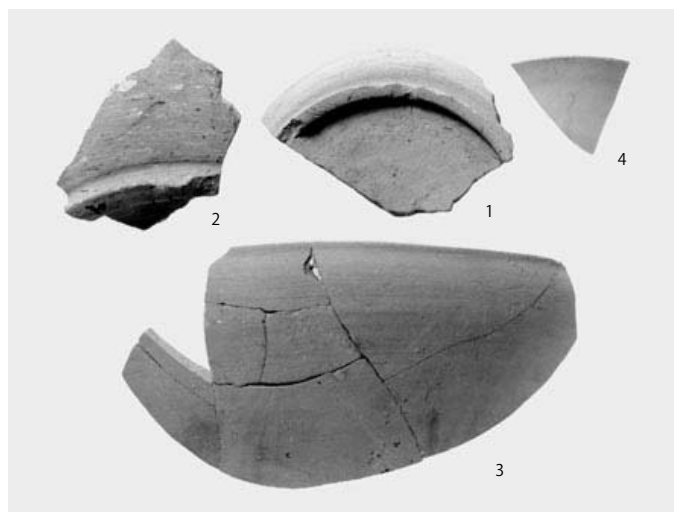


図 11 出土土器

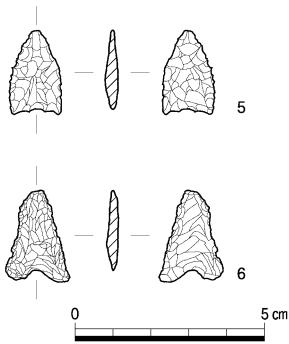


図12 石鏃実測図(1:2)

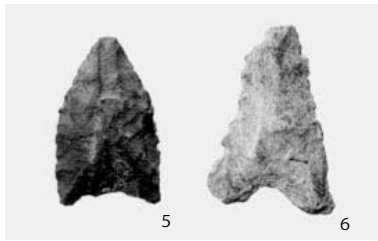


図13 石鏃

外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面は施釉されているが、いわゆる口兀であり、口縁部の上端は釉が削り取られ、露胎となっている。

(2) その他の遺物(図12・13)

瓦類、石製品、木片、種子、骨などが出土した。木片は建物1の柱穴からヒノキ・ヒノキ科・ハイノキが、種子は溝20・30からモモ、骨は溝20から鹿の踵骨が出土した。石製品はほとんどが細片・少数であり、それらの中から比較的残存状態のよい石器2点のみを図示した。

(5・6)は縄文時代の石鏃であり、両者とも基部が凹む無茎式である。5は縦約2.3cm、横約1.3cm、厚さ約0.3cm、重さは約0.99gを測る。石の種類はサヌカイトである。一面は丁寧に剥離を施すが、他面の剥離単位はやや大きい。外郭は、小さく丁寧な剥離を加え、エッジを鋭くしている。6は縦約2.4cm、横約1.7cm、厚さ約1.3cm、重さは約1.09gを測る。5と比較すると、剥離面はやや大きく、基部は深く凹む。外郭は丁寧に剥離を施し、エッジを鋭くしている。片面が歪な形状であり、破損したものと見られる。5・6は

長岡京期の南側溝である溝30から出土した。近隣の遺跡からの二次堆積遺物である。

註

- 1) 土器の年代については、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』(有)京都編集工房 2005年に準拠した。

5. ま と め

長岡京期の主な遺構は、東西溝の溝 20・30、建物 1 である。この内、溝 20・30 は三条条間小路の推定地にほぼ位置することから、それぞれ南北の側溝であり、路面などは確認できなかったが、この両溝間が三条条間小路路面と考えられる。両側溝心々間の距離は、9.25 m 前後（約 31 尺）である。調査地から約 700 m 西側の長岡京跡左京第 151 次調査で検出した三条条間小路と比較すると、北側溝が溝 20 より約 4.5 m、南側溝が溝 30 より約 4.4 m ほど北に位置しており¹⁾、検討を要する。また、溝 20・30 は、平安時代に比定できる遺物は出土しておらず、長岡京廃都後のかなり早い時期に埋没し、側溝として機能しなくなったものと考えられる。

長岡京期の遺構と同一遺構面で耕作溝を数多く検出している。出土遺物から耕作溝の時期は、鎌倉時代末期から室町時代前期であり、調査地はこの時期には耕作地化していたことが明らかになった。遺構面より上層は、水平な層が順次堆積しており、その間には現在も近隣で使用されている竹の入った暗渠が検出されることなどから、耕作地として現代まで至ると考えられる。

註

- 1) 辻本和美『京都府遺跡調査概報第 22 冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年。この報告書では二条大路の側溝と記述されているが、「長岡京条坊復原図」『都城 10』（1999 年）では、左京三条三坊六・七町および三条条間小路に推定される。それぞれの日本測地系座標を表にまとめておく。なお、今回の調査で検出した側溝の座標値は、世界測地系から座標変換した値である。

三条条間小路両側溝（推定）の日本測地系座標値

長岡京調査地／長岡京条坊		北側溝座標	南側溝座標
左京第151次	左京三条三坊六・七町	X=-118,063.00	X=-118072.30
左京第529次 (今回の調査)	左京三条四坊十・十一町	X=-118,067.46	X=-118076.71
『都城10』長岡京条坊復原図の条坊復元値		X=-118,066.04	X=-118074.92

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうさきょうさんじょうしぼうじゅう・じゅういっちょうあと							
書名	長岡京左京三条四坊十・十一町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-16							
編集者名	布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうさきょう 長岡京左京 さんじょうしぼう 三条四坊 じゅう・じゅういっちょうあと 十・十一町跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 こがにしでちょう 久我西出町 ばん 8-8-8-9番	26100		34度 56分 19秒	135度 43分 28秒	2008年11月 26日～2008 年12月26日	約288㎡	工場新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京左京 三条四坊 十・十一町跡	都城跡	縄文時代		石鏃				
		長岡京期	東西溝2条、 掘立柱建物1棟	土師器、須恵器、黒色 土器、瓦、木片、骨、 種子		三条条間小路を検 出した。		
		平安時代		土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、黒色 土器				
		鎌倉時代末期 ～室町時代	耕作溝	土師器、瓦器、輸入磁 器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-16
長岡京左京三条四坊十・十一町跡

発行日 2009年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961